

想うがままに

追悼 存分に闘ったぞ、田中真人くん 本誌編集委員 小寺山康雄

四月四日、田中真人（同志社大学人文科学研究所教員）が六三歳で亡くなった。世界でも数十人しか発症してないクロウ・フカセ症候群とよばれる難病と、一六年間闘ったあげく燃え尽きるようにして逝ってしまった。

この病気は末梢神経から冒され、しだいに身体中に異物が発生し、臓器を蝕む恐ろしい病気だが、今のところ決定的な治療法はない。田中の場合は、皮膚、胆嚢、胆管、尿管、腎臓、網膜が侵され、二年ほど前から右目はまったく見えない状態だった。

それでも田中は通算一万二〇〇〇キ

ロ（田中の表現によれば、ユーラシア大陸を横断し、ポーランドワルシャワ郊外に達する）に及ぶジョギングこそ断念したが、本や資料は残された左目で読み、ときにはCDを通して耳で読み、原稿はパソコンを駆使してブラインド・タッチで書くなどして、入退院を繰り返しながら、研究者としての仕事を死の直前まで続けたのである。

第三次『現代の理論』の旗揚げに際しても、準備段階で関西在住研究者の集まりに病をおして参加してくれた。頃合いをみて執筆してもらおうと考えていたが、病気を配慮するあまり機会

を逃したのが残念でたまらない。

つっこまれ、ボケで返した
最初の出会い

田中とおつれあいの美千代さんと知り合うようになったのは、九六年夏、ワルシャワ、クラコフ、アウシュヴィッツ、プラハ、ウィーン巡りの旅をしてからである。当初は尾崎ムゲン夫妻と行くつもりだったが、ムゲンが「いつ逝ってもおかしくない難病に罹っている友人がいる。京都市に対して『君が代訴訟』と一緒に闘っている仲間なの

で、ぜひ連れて行きたい」と言うので、一も二もなく了解した。

出発前の顔合わせ会で、田中は七〇〇〇円もする大部『一九三〇年代日本共産党史論』（九四年、三一書房）を「名刺代わりに」とくれた。そして「あなたは統一社会主義同盟の機関紙『平和と社会主義』の二代目編集長であり、故山田六左衛門さんに次ぐ統社同二代目議長。二代目ばかりですね」と、ツッコミを入れてくるではないか。そこでは「ついこの前も、市民運動情報紙『ACT』の編集長を毛利子来さんから引き継いだばかり。これまた二代目や。要するに偉大な先代の遺産を食い潰すのが使命の二代目ちゅうこっちゃ」と、ボケを返してやった。冗談のわからないムゲンに怪訝な顔でぼくと田中を交互に見ていたが、田中はツッコミ成功とニタニタしていた。

このときの顔合わせで、田中が左翼小政党、小さな社会運動団体・個人な

どの放置すれば散逸してしまうだろう機関紙誌やビラの類まで、ときには自腹を切っても収集・製本し、誰でも閲覧可能なように人文科学研究所に保存していることを知った。『平和と社会主義』も『ACT』も、その中に含まれていたのだ。

おそらく田中はいわゆる「正史」が抹消し、無視する非・反正統派の運動や膨大な無名の諸個人の活動も、まがうかたなき人民の歴史として記録され記憶されるべきと考えていたのだろう。彼が亡くなった今、アカデミズムの業績とは無縁のものとして扱われかねないこのような仕事を引き継ぐ研究者は、はたしているのだろうか？ 同志社大学は保存を続けてくれるのだろうか？ この一事をもつてしても、得難い人物を失ったものだと思う。

得難い人物を失ったということでは、田中を「いつ逝ってもおかしくないから」と旅に誘った尾崎ムゲンは、

五年前六〇歳になったばかりなのに、田中より先にリンパ腺ガンであったという間にこの世から旅立ってしまった。『現代の理論』を復刊した今、ときどき「噫、ムゲンが生きていたらなあ」と、嘆息するばかりである。

二〇年続いた社会主義理論政策センター、とりわけその教育問題研究部は無類の人の好きと面倒見の好さを發揮して人びとを集め、支えてくれた名オルガナイザーだった。彼は、最後のオルグの仕事として亡くなる一年前、つれあいの百合子さんを長岡京市の市民派議員に送り出して逝ってしまったのである。

ぼくと田中の共通する
マザコンと政治的早熟

ぼくと田中の間には、外見も性格も仕事も似ているところはまったくくない

が、三歳違いながら、同世代といつていい彼とは幼少期から学生運動時代までの人生では共通するところが多い。

田中が還暦を記念して出版した『集外抄』から共通するところをいくつか抜き出してみよう。

まず、母との関係について。二歳にして父を亡くした田中と、父が九六歳の今も生きていくほどとはまったく違うが、母の頑張りとうれしさへの尽きせぬ思い、つまりマザコンということでは完璧に共通する。

戦後の飢餓時代、寡婦として一家四人の糊口をしのいできた田中のお母さんは、ヤミ米のかつぎ屋を生業にし、立錐の余地ない蒸気機関車で買い出しに行く。小学生の真人も何回か同行するが、S&Lというのは油煙やゴミが眼の中にとびこんでくるのである。「母はそんなとき、自分の舌で私の眼のなかのゴミをふきとってくれた」。

頑張り屋で優しくかった母も、田中が

二五歳のとき六三歳で早逝する。田中が五六歳のとき、長女と参加した中国ツアーでハルピンを訪れる。田中は、「麦わら帽子と手ぬぐいをかぶって汗みどろになりながら、リアカーを引いてくる中年女性と、それを後押しする一〇歳くらいの男の子の姿に接する。凝視するうちに。みずからの大昔の情景を重ね合わせて思わず落涙してしまふ」のである。

ぼくは六七歳になった今でも、酔いすぎて眠れぬ夜、母を想って号泣することがしばしばある。

次に政治的早熟について。

五一年、田中八歳のとき、朝鮮戦争について絶叫的演説をしている「精悍な共産党員の姿を見て(中略)、ほれぼれとして見入る」のである。

ぼくも一〇歳のときまったく同じ経験をしたが、今の共産党も子どもも隔世の感がある。

五八年一五歳のとき、勤評闘争に中

学の生徒会長としてささやかな連帯闘争を試みるとともに、『アカハタ』、『世界』の購読を始めたというが、いくらなんでも早熟すぎる。「日本共産党の入党資格は満一八歳以上であることを知り、その歳になることを待ち遠しく思う」などは、ぼくもまったく同じ気持ちだった。

* * * * *

死の直前、田中は美千代さんに「もう贅沢は言わない。定年まであと二年生きて『近代社会運動家の書誌目録』を完成させたい」と、つぶやくように言ったという。美千代さんは「(完成できず)さぞ無念だったろうと思いますが、信頼する医師のもと(この辺りは小寺山様と違うと言っています)、存分に闘って逝ったとおもいます。多くの知己を得て充実した人生だったとも思っております」と述懐されている。

さようなら、田中真人くん。